

教育実習で学んだことに関して、学級運営、教科指導、そして教員としてどうあるべきかという観点から述べたい。

学級運営では、クラスの中で不平等が生じないように気を付けることが重要だと学んだ。掃除など日々の活動においても、していない人がいると、真面目に取り組んでいる生徒が不満を持つ。行事の決め事においても、積極的に意見を挙げる生徒の意見のみが通ってしまうと、少数意見を持つ生徒が投げやりになってしまうことがある。どんな活動においても、生徒全員がクラスに参加しているという意識を持ち、またその意識をクラスメイトと共有することが大切だ。生徒の主体性を尊重しつつ、教員はそのような観点からサポートをしていく必要がある。

教科指導に関しては、観察することが授業を成功させるために不可欠だと身をもって学んだ。観察はじっと見つめるということではなく、生徒のその日の様子、プリントや小テストの出来具合、発言の内容や授業中の質問に対する答えなどから、生徒のレベルとモチベーションの程度を知ることだと分かった。授業中のクラスの様子の一瞬を捉え、それに対応していくことは非常に難しかったが、鋭い観察力を持ち適切な対応をすることは生徒との信頼関係にも関わるのだと分かった。

生徒をしつけるということも教員の仕事であるが、自分の価値観の中にある正義だけを生徒に押し付けることは良くないと分かった。生徒をよく観察し、生徒を小さな大人として尊重し、先生という立場だとしても常に謙虚な姿勢を持って学び続けることが大切だと気が付いた。実習先で生徒に慕われていた先生方にはこのようなところで共通しており、威圧的に指導せずに対話的な姿勢を取っておられた。教員の姿勢は生徒にも影響することも分かった。生徒にどんな人になってほしいか、どんなクラスにしてほしいかを常に意識して行動しなければならない。